

欲しかった情報

神奈川県 三浦光敏

昭和二十一年（一九四六）年八月の昼下がり、満州・ハルビン市の上空に、星のマークが付いた偵察機が飛んできた。初めて見るアメリカ機であった。その機体は、何かを訴えるかのように低空を何回も旋回した。

当時、残留日本人の間で祖国引揚げが間近といううわさが立っていたので、その交渉をしにきたのに違いなさと直感した。緑色の機体は翼を左右に振りつつ、窮地の生活に落とされている我々に、何かの意志表示と活路を与えているのだと思うと、胸が鼓動し、目頭が熱くなった。程なくして、祖国への引揚げは現実のものとなった。

我々の一家が、満州に移住したのは昭和九年で、父は日本のいわゆる、「昭和金融恐慌」を逃れ、新天地を求めてハルビン市にやってきたのだ。

小学校五年生に転校した私は、九州出身の生徒が多いクラスの雰囲気になじめず、登校を拒否し、その結果二年間だけ満州人の小学校に移籍留学をした。子供ながら父と同様に新天地を求め、中国語になじんだことは、それ以降の人生に大きく影響した。小学校卒業後は、再び日本人の中学校に入ったが、その間に日中戦争や、ソ満国境でのノモンハン事件などが起こった。学校では、やがて来る名譽の召集に、関東軍の精鋭戦士として恥ずかしくないように、学業にも戦闘訓練にも力を入れた。

卒業後、日本の高等学校を受験するつもりであったが、当時、朝鮮と日本内地との間の海峡をつなぐ閔釜連絡船が、アメリカの潜水艦に相次いで撃沈される事態が起こり、渡航をあきらめて、ハルビンの国立工業大学に入った。入って間もなく勤労働員で、ソ連と満州の国境近くへ行き、軍用道路を建設した。また、翌年の昭和二十年の春には、南満州の製鉄所で鉄鋼の増産に励んだ。

忘れもしないが、動員からいったん帰宅して、再び

学業に復帰していた八月八日、ソ連が突如として対日宣戦を布告してきた。その前には八月六日、アメリカが広島に原爆を投下した。その衝撃が覚めやらぬ間の出来事であった。ソ連軍は怒とうのごとく満州国への越境を開始し、九日には京都の新京（長春）やハルビン市にも小規模な爆撃を行い、市中はこれまでに経験のない不気味な灯火管制下に入った。

そして運命の八月十五日がやってきた。前日の八月十四日に、召集令状を受け取っていた私は、翌日学校の校庭に集合し、約百人の同級生と共に近くの部隊に入隊することになっていた。ハルビン市を死守する決意は固まっていたが、それは祖国や天皇陛下のためにというよりも、我が家の父母や兄弟、隣人のために防戦するためという気持ちであった。

真昼間、校庭で一台のラジオの前に整列した我々は、雑音の中からかすかに玉音を聞いた。それが敗戦を告げるものであることと知るには、時間が掛からなかった。しばらくして、学長は我々のどよめきを押さえ、入隊を中止する決意をされた。このときから我々

は、見知らぬ世界に投げ出されてしまった。地雷を抱きかかえて、ソ連軍の戦車に体当たりをする覚悟でいたのが、その決意はあつという間にはぐらかされてしまった。クラスの中と行動を共にするよりも、我が家を守ることが先決と考えて、帰宅することにした。

この街に実家がある親友と一緒に戻る道すがら、彼と今後どのような事態が予測されるだろうかと話しながら歩いたが、次の瞬間、大変な予感が心中を走った。ソ連軍が市内に進駐してきたら、どのような事態が発生するかということであった。彼らが、ポーランドやドイツで捕虜を虐殺した報道は何回も聞いていた。ここでも恐らく同じことが起きるであろう。

私は、人の手に掛かって運命を左右されることには絶対に反対であった。若い連中は必ず逮捕され、無差別に殺されるか、あるいはシベリアなどに送られて重労働に服し、死を待つ運命をたどることになるであろうと考えた。「侵略軍と戦えないならば、いっそのことハルビンを脱出して中国本土まで行き、そこで再起を図るのはどうだろうか？」と決意を述べたら、彼も

しばらく考えたあげく、「その通りだ！」と賛成し、「一緒に行こう」と、言ってくれた。しかし、これは私の長い人生の中で犯した重大な過ちで、私や彼の両親の思いなどは、少しも考えに入れていない非常な判断であった。家に戻って、両親にこの考えを告げ、「若者は必ず拉致されるだろう。私は死にたくない。だから私を逃がして下さい。必ず生き延びて見せます。行かせてください！」と、必死になって頼んだ。

父は長いこと思案していたが、やがて「お前ならできるかもしれない」とほつりと言ってくれた。

この計画は、ハルビン市から南満州鉄道に沿って徒歩で南下し、ソ連の支配地域から離脱後、汽車を探して中国本土に入国するものであった。ぼろぼろな中国服に着替え短刀一振りを隠し持ち、麦わら帽子をかぶり、若干のお金と水筒だけで、葉も持たずに両親に別れを告げた。私は、親友と待ち合わせ場所の郊外近くのキタイヤスカヤ街の石畳の縁に腰掛けて、ひたすら彼を待っていたが、ついに姿を現さなかった。

引き揚げてから十年後に、東京で彼と再会したが、

そのときに彼は、「三浦、あのときお前は実行したのかよ？」と聞いてきた。私は「ああ！」と答えるだけで、約束不履行の彼をとがめたりはしなかった。いや、できなかったのである。彼には、両親を見捨てるわけにはいかなかったのであろう。しかし、それ以来彼は、何かにつけて私の面倒を見てくれた。

終戦の日の八月十五日の夕方、私は市内から離れた。そして南を目指して一目散に歩いた。夜の帳が西空に降りるころ、私は高粱畑コウリヤンのそばの農道を、どこで寝るかを考えながら歩いていった。そしてこれからの長い旅には、野宿も覚悟しなければならぬと思い、結局その高粱畑に入り込み、付近の草を集め寝床を作った。握り飯を食べ、水筒の水を飲み、満天の星空を眺めながら、両親を思った。歩いているときに考えたことは、自分の行動の善し悪しであった。それは何も整理がつかぬままに、ソ連への恐怖感だけで我が身を処したことに對する反省でもあった。

やがて、この行動は大変に甘過ぎたことを知らされた。横になってから、ものの十分間もしないうちに、

「ぶーん」という音が耳元で聞こえた。やぶ蚊の襲来である。やがてその音は、ラジオのポリウムを上げるかのように拡大され、数百の、あるいは数千の蚊の大群が、顔といわず首筋といわず露出しているところを目がけて襲ってきた。持っている布切れを全部引っぱり出して防戦したが、隙間から入り込まれて、徹底的に食われてしまった。それでも夜明けまでの僅かの間まどろんだが、朝日が差すころには一匹の蚊も消え失せ、かゆいのか痛いのか分からず、ただぶくぶくした跡だけが残っていた。満州の荒野での野宿は、とてもではないができそうもないことを悟った。

鉄道は進行方向の左手にあって、遠くには長く連結した列車がハルビン市へ向かっていくのを確認した。それは、ハルビン市へ侵入するソ連軍の軍用列車に違いないと思った。

そのころ、満州国の東部、沿海州に近い国境周辺では、日本の部隊が悲惨な事態に直面していた。その中には中学時代の同級生下君もいた。彼は、文科系の学校に行つたために、昨年召集されて、この日は国境に

近い戦略上極めて重要な地点の、ある建物内で昼食をとっていたそうだ。後年、彼が書いた当時の手記を借りて読んだが、「東方の街道から、ソ連軍の戦車部隊がこの建物を目指し、ごうごうたる音を立てて侵攻してきた。不意を突かれたが、直ちに戦闘態勢に入った。しかし頼みとする軽機関銃は三丁しかない。ソ連兵は、巨大な戦車群の陰から銃撃してきた。そのけたたましい銃声から判断して、明らかに自動小銃であり、しかも全員が、そのマンドリン式の六十連発銃を持っていた。敵の攻撃目標は、我が方の数少ない軽機関銃であつて、ここに敵弾が集中し、戦友がばばたと倒れて行つた。生まれて初めての死闘！ つい今し方まで元氣であつた戦友が、目の前で無残な姿に変わり果てた。やがて手榴弾の投げ合いによる白兵戦になった。建物の中からは、怒号とも悲鳴とも分からぬ声が聞こえ、ある小隊が銃剣を構えて、敵に突っ込む喚声が目玉めいた」という内容のことが書いてあつた。この中隊は、やがて小戦闘を続けながら、はるか南の日本軍の集合地点までたどり着き、分散していた

国境守備隊と合流して降伏し、シベリア送りとなった
そうだ。

同じころの夕暮れ近く、私は高粱畑端の小道を小走りに歩いてきた。すると荷物を担いだ一人の老農夫に追いついた。その老人は数里先の農家の主人で、私が、「兄貴を捜しに鉄道沿線の陶頼昭の町まで行く」と話したら、「それは大変だ。よかつたら今晚は私の家に泊まれ」と言ってくれた。老人の家は畑の中に立つ泥壁の一軒屋で、電灯も無い薄暗い部屋のアンペラの上に七、八人の家族がいた。彼らは、まだ日本の敗戦を知らずにいたようだったが、わずかなお金を出して、夕食の高粱飯と一緒に食べさせてもらった。

八月中旬の夜は、真昼の熱がまだこもっていて寝苦しく、家族は布団も無しに、ごろ寝をしていた。少しまどろむと、何かが跳ねる音がした。すると、あちらこちらががやくなつた。差し込む月明かりを頼りによく見たら、アンペラの上でのみの大群が跳ねている。昨夜の蚊の軍団よりまだましだと思いつつ、再び眠りに落ちた。

翌朝、粥を頂き、赤い高粱飯を葉っぱに包んでもらい、感謝の言葉を述べて出発した。

数時間も歩いて汗が出てくると、途端に腹の辺りがかゆくなつてきた。土手に腰掛けて、腹巻きをめくると、何と毛糸の編み目の各列に虱がびっしりと並んでいた。この二日間で、蚊とノミと虱の総攻撃を食ったことになる。明るい日差しの下で、その虱をゆっくりに、一匹ずつ退治することにした。

小一時間もかけてつづし終わり、土手を降りて再び高粱畑の脇の小道に出た。そして、一步広い道に踏み出したとたんに、「バーン」という銃声と共に銃弾が頭の上を「ビューン」と通過した。同時にばらばらと人影が現れて、銘々が銃口を私に向け、口々に「不要動！ 不要動！（動くな！）」と連呼した。

よく見れば、十五、六歳の子供たちが取り巻いている。その中には四、五人の娘もいた。その怪しい中国語の発音から、彼らは日本人で開拓団の人たちだと察した。彼らから見ると私は、十分に怪しい人物であった。「皆さん、私は日本人です。ハルビンからきました。

た。南へ行く途中です」と釈明したが、銃剣に囲まれて、彼らの屯所まで連行された。

そこには数人の老人がいた。そして、私がなぜハルビンを脱出したのかについて、詳しく尋ねられた。彼らは、日本の敗戦を既にラジオで聞いていた。ハルビンの本隊に斥候を送り、状況を確認している最中だとも言っていた。私は、「ハルビンにはもうすぐソ連軍が侵入する。日本の軍隊は、武装解除されているはずだ。ソ連軍に捕まるのが嫌だから、ハルビンを逃げ出してきた」と言ったが、さらに「どこへ行くつもりか？」と聞くから、「中国本土まで行く」と答えたら、皆、あ然とした顔をしていた。彼らは、ソ連軍の侵入がそれほど早いとは知らず、予想される事態についても何ら想定していなかったの、私はそれについての危険さをおおげさに話をすることは避けた。一晩中相談していたらしいが、結局隊長らしき老人から、「事態が急変しているから、ハルビンの本部にひとまず引き揚げる。その上で対策を考える。ところであなたはどうかされるか。我々がハルビンに引き揚げる途中で、

中国人による襲撃や略奪が心配だから、通訳として面倒をみてくれないか」と頼まれた。自分の先行きに迷っていた最中ではあるが、この老人、子供の一団を見殺しにすることはできず、また多少の里心も出てきたのは確かなことなので、思い切って彼の依頼を受けて引き返すことにした。

翌朝、約三十数人の一団は、数台の大型荷車に家財道具を積み、万一の場合を想定して各車に銃を配備して、現地を出発した。この開拓団は、鉄道に沿って展開された支隊の一つで、二十歳以上四十歳代までの団員は既にことごとく召集されていて、残ったのはわずかの男性老人と、女性と少年たちだけであった。馬車隊は暴徒による襲撃にも遭わず、約五十キロメートルの道のりを走り抜け、その日の夕方遅くハルビンの市内に入る事ができた。「皆さん元気でね！」と言って別れを告げたが、それ以後彼らの消息は聞いていない。満州開拓団の総数は、約二十七万人と言われており、そのうち帰国ができた人は約十二万人であったという。半分にも満たない帰国であったが、私の運命を

変えてくれた彼らが、無事に故郷へ戻れたものと信じるばかりである。

我が家の建物の前にたどり着くと、大門には十字の板が打ち付けられ、よそ者の立ち入りを防いでいた。両親は私の顔を見て涙を流し、無事を喜んでくれた。

「光ちゃんの腹巻きには虱がムノゴ（ロシア語でたぐさんのこと）いた。熱湯消毒をしたよ」という母の言葉は、今なお耳に残っている。

それから三日後に、私は突然発熱した。連日四〇度に近い高熱でうなされたが、病名が分からないし、病院も閉鎖されていて、医者も薬も一切なかった。勝手に放浪した罰があたったと思ったが、こんなことでは死ねなかった。

またあるとき、鼻の奥が詰まり、息をのんだとたんに鼻孔から血の固まりが一つ二つと、そのうちにぼろぼろと幾つも流れ出てきた。これで我が人生は終わるかと思った。

そんな最中、いわゆる「男狩り」が始まった。帰宅してから一週間もたったころであった。マンドリン式

の自動小銃を抱えたソ連兵が二、三人、どやどやと我が家に立ち入り、男を捜し始めた。六十歳に近い父も近所の主人たちも、皆連れ出された。市の南部地区にいた私の友人も、同級生も一緒に貨車に乗せられ、はるか東方の牡丹江市郊外の収容所に送られた。私は大病で床に就いていて、やせ細っていたので連行を免れた。姉は、私をいぶかしげに見入るソ連兵に、ロシア語で「この子は伝染病だから近寄らないで！」と言うと、彼らは慌てて立ち去った。父は、私に「最後まで頑張るのだぞ。決して死ぬな。あきらめるなよ！」と言って去っていった。残ったのは、母と横道河子という町から避難してきた姉夫婦と、四つ下の弟で、拉致を免れたのは、部屋の中二階に作られた倉庫に隠れていたからだだった。

生きるためには食べなければならぬと思い、母に「野菜なら何でもよいから買ってきて」と頼み、母は危険を冒して買いに行ってくれた。青ダイコン、ニンジン、キュウリなどをおろし金ですり下ろし、それに少々のお粥を毎日無理して食べた。二カ月たって、

私はまだ生きていた。体重は以前の半分になってしまつて、目玉だけが大きく、足はゴボウのようにやせ細っていた。

早い秋も去り、初冬を迎えるころ、父が解放されて戻ってきた。やせこけた私を見て、泣いてくれた。そして「薬もないのに、よく生きていた。お前は強い運命を背負っている。もう大丈夫だぞ！」と言ってくれた。何と、その日から私の体はめきめきと回復した。

牡丹江市の収容所に抑留された人々は、一般人だけであつたそうだ。兵隊は、日本に強制送還すると見せかけ、その実シベリアへ送られた。幸いなことに、一般人には強制労働を科せられることはなかったが、食糧や寝具の不足、水の悪さや夜の寒さから病人が続出したそうである。着の身着のままの姿で連れ出された同級生も、ハルビン市に戻つて早々に栄養失調になつて、二人が亡くなつた。一般人をなぜシベリアに連れて行かなかつたのかについて、一つの理由は、既に日本の武力を徹底的に解除したことで、もう一つの理由としては、略奪に力を注いだことにあると思う。彼ら

は満州国のすべての工場などから、役立つと思われる機械、モーター、機器材、油類、車両などを、ほとんど日本兵の強制抑留と平行して、貨車でことごとく運び去つた。そのうえで一般人までも拉致したら、食事、宿舎、管理などで面倒このうえもないことだろう。

人生の中で、一番めでたくない正月、昭和二十一年元旦を迎えた。統制時代には手に入らなかつたような食料品も出回るようになったが、日本人は身の回りのものを街頭で売り、わびしい日々を送つていた。私の体は、父の解放によつて元氣付けられて、そろそろ歩ける程度まで回復した。

一月の末になると、極寒の中を、着の身着のままの身なりの日本人避難民が、奥地から続々と到着した。収容設備や食糧が大幅に不足していることを知つた。何かお役に立たなければならぬと思い、できたばかりの日本人難民救済委員会を訪れた。ここで、かつて私の中国語の恩師であつたI先生に出会つた。先生は、渉外部長をされていて、難民の問題で中国市政府に請

願する書類の作成や、中国人とのトラブル解決の仕事を担当されていた。昔のよしみですぐに採用されて働くことになった。私の仕事は、難民救済のための請願書類を中国の役人に届け、かつ後にもらう「許可」の感触を把握することであった。当時中国語の達者な大人は、以前に戦犯にかかわる仕事に携わっておられた方が多く、それぞれに身辺の危険を感じておられたから、私のような職歴無色の青年が役に立ったのであろう。

中国人からの、住居立ち退き要求を防ぐ交渉も手伝った。市政府から、いかなる理由があろうとも店子を追いついてはならぬという通達が出ていたが、それを知る中国人は少なく、あちこちで日本人だけを追い出す家主が出ていた。私は、胸に市政府発行の身分証明書バッチを付けていたので、これを相手に見せ、「追い立てれば、中国政府から厳罰を受けることになるが承知か？」と声高に文句を付けると、大方は解決した。

難民問題の請願書は、日僑難民委員会という役所の

窓口で扱ってくれる。しかし、役人は持って行った請願書を見てもいろいろなことと言ひ掛かりをつけ、すぐには許可してくれないこともあった。それでもそのような感触を知っているので問題を解決する方策が見い出された。

この時期、中国本土では国共合作が成立しつつあったが、満州ではまだ国民党が優勢であり、ソ連軍の管理下で行政を取り仕切っていた。しかし彼らの組織の中には、既に共産党の組織が食い込んでいた。

市街には、ソ連軍が発行した赤い軍票が多量に出回っていた。更にその上に、東北銀行の新しい地方紙幣も出回ると、物価も一段と上昇して、日本人抑留者の生活はますます苦しくなった。難民が増える中で、宿舎、食糧がひっ迫してきた。食糧を難民に配給する仕事は、日本人難民委員会の最大課題となった。

ハルビン市に冬が来ると、避難した建物の中には暖房設備がほとんど無く、難民は零下の気温の中の生活を余儀なくされた。体力の低下から病気にかかり、亡くなる人も激増していた。その姿は直立不動の姿勢

で、事が切れたかのように、細い腕が短い服のそでから棒のようにのぞいていた。

戦後、私は何度か引揚げ前後の様子を書く機会があったが、このことを書くことができなかったのは、死にひんしている同胞を助けることができなかった後悔が、強く残っていたからである。

ある日、墓が足りなくなったので、郊外の土地買収交渉に行ってくれと命令された。しかし零下十何度の凍土を掘るのは難しく、結局窪地を探して、埋葬することになった。これでは、人々の霊が慰められるはずはない。

旧正月のころになると、物価が更に高騰して、三月の初旬には、市政府の要人で共産党系の大物であった「李兆麟」が、国民党の特務員によって暗殺された。それ以来、国民党と共産党との争いは一層激しくなっていた。

ソ連軍は、例によってハルビン市に長期駐屯をするのかと思っていたが、年末になると、国民党政府に対し武装勢力を引き揚げるとの通告を出した。しかし、

北辺の中国共産党の軍隊の編成が整うのを待っていたのか、あるいは満州におけるありとあらゆる物資、資材を本国に持ち帰る時間が十分でなかったのか、四月の下旬になってやっと撤退を開始し、帰国し始めた。

それと入れ替わって入ってきたのは、東北民主連軍 陝・甘・寧三五九旅団や、山東七師団十九旅団を主力とする共産軍であった。彼らは、声高らかに「三大規律・八項注意」を意味する軍歌を歌い、三列縦隊の隊伍を組み行進していた。その見事さからすると、既に前から組織化していて、北方からの制圧をねらっていたものと思われた。

ソ連軍の撤退情報が伝わりと同時に、国民党系の市政府の役人は、一斉に逃亡してしまった。そのため難民救済の申請業務は一時停止せざるを得なかった。

共産軍は、間もなく宿舍不足を理由に、日本人の家庭に一時宿泊するという指示が伝えられた。我が家にも十人ほどやってきて、宿泊した。彼らはいんぎんな態度で接し、「皿や箸などを借りたい。壊れば必ず弁償する」と申し出た。今考えると、この宿泊や物を

借りる手段は、共産軍が善人の軍隊であるという心証を高め、人心の安定化を図る巧妙な手段であったと思ふ。

共産軍による市政府の活性化は、敏速に行われ、六月にはソ連軍が発行した軍票や、元満州国の紙幣、国民党発行の東北流通券などの使用が禁止された。こうした目まぐるしい変化に、日本人の生活は益々苦しくなり、残り少なくなった衣類や家具を街頭で売り、わずかな日々の糧を稼ぐよりほかはなかった。

遅い春がやってきて、共産軍による行政管理が安定し始めると共に、また一つの事件が起こった。それは、各地で行われる「清算大会」が段々と活発になってきたことである。国民党の特務や、日本人の要人、軍や警察の幹部がその対象となり、街頭で大勢の民衆が取り囲む中で「即決裁判」「即決銃殺」の刑が執行された。更にその追跡の手はついに難民救済委員会の会長にまで及び、わずかな期間にT氏、M氏と逮捕されてしまった。二人ともよく知られていた方であったが、中国人からは嫌われる行為があったようだ。民衆

の熱狂に訴える裁判のやり方は革命には付きものであるが、数多くの著名な人物が空しく消えていったことは残念でならない。

アメリカの軍用機が飛んできたのは、ちょうどこのころであった。日本人の引揚げが現実化し、地区ごとに態勢作りが始まった。八月中旬、東北民主連軍司令部は、アメリカ代表フェールと、日本人難民の送還に関する協定を結び、「ハルビン及びその付近一帯より、毎日七千五百人を松花江ショウカコウに移送し、政府は渡河船舶の提供を保証する。かつ九月三十日までに全員の送還を完了する」との通達を出した。当面の課題としては、帰国列車の途中乗り換えの問題が出てくる。その理由は、ハルビン市と新京の間にある大河の松花江を挟んで、国民党軍と共産軍が対立していたからだ。鉄橋はとうに爆破されていて、線路はその橋脚までも乱雑に壊され、その二・三キロメートルの区域のレールを取り除かなければ、歩行することができない状態にあった。そのため各隣組から使役を出すようになり、そのことを先方にも通知されたようで、砲撃も受

けず作業は順調に進み、四、五日で無事に終わった。

このころ、共産軍の陣地ではコレラが発生し、黄色い胃液を吐いて苦しんでいる兵隊がいた。作業そのものよりも、伝染病にかからぬように煮沸消毒を徹底して行い、常に手を洗っていたことが印象に残っている。

さあ、帰国だと持ち帰れる物はリュックサックただ一個と、千円札一枚だけである。人々は、満州で十年以上しし営々として励んだが、その末路は入り口に戻っただけと嘆いていたが、命を奪われずに済んだだけでももうけで、後は未来に運命を託すだけであった。

八月下旬、我々の大隊は百人単位で編成し、ハルビン駅に向かった。駅の構内で待っていたのは、中国の学生を主体とする大勢の検査員たちであった。彼らは、医者や技術者を発見して出国を阻止したり、持ち帰り禁止の物品を見付けるのが任務であった。我々のところにも数人がやってきて、リュックサックの中身を虱つぶしに調べ出した。そのうちに、我が方の女性

が悲鳴をあげたので飛んで行くと、何と中国人女性の検査員たちが、一袋の脱脂綿を引っ張り出して取り合っている。当時は生理用品が不足していたので、彼女たちは自分用にと取り上げるつもりの方だった。

私は駆けつけて、「それは禁止物品ではない。同じ女性なら、必要か不必要か、分かるでしょう。若い我々は、これからも仲良くしていこうではないか」と頼むと、泣々と返してくれた。

小一時間ほどの検査の後、汽車はハルビン駅を出発した。かつて駅のプラットホームにあった明治の元勲伊藤博文の銅像も、いつの間にか消えていた。数多いロシア寺院の懐かしい鐘の音も今は無く、美しいハルビンの市街と静かにお別れした。

何時間かの後に、第二松花江が近い土手の線路に着した。ここは先日、我々勤労隊がレールを撤去し、帰国者たちが歩きやすいように整備した場所である。河の辺りまで、約二キロメートルを歩かなければならない。重いリュックサックを背負い、また赤ん坊を抱き、皆が一生懸命に歩いた。四、五歳の子供でも、遅

れまいと健気にも親の後ろについて歩くのであった。

河原に着いたときは、夕暮れ間近であった。そこには鉄かぶとをかぶり、迷彩色の軍服を着て、狙撃銃を持った国民党軍の兵隊が数人いた。「渡河は明朝。今晩は河原で野営をしろ」と命令された。我々は、引揚げにはいろいろな事態が発生する覚悟でいたから観念したが、八月下旬とはいえ、夜の寒気は厳しかった。そのうえに、国民党の兵隊は、金銭のほかに女を出せと難題を要求してきた。数百人の中には、以前遊郭で働いていた女性が数人いたので、我々の身代わりになつてくれたが、このような屈辱的な事件は何十年たつても忘れることができない。

翌朝、舷外機付きの船艇に乗って対岸に上陸した。その先には、機関車と無蓋貨車が待つていた。平たい台だけの貨車から落ちることのないように、台の縁にリュックサックを並べて囲い、その中に人が詰めて座った。機関車は時折、蒸気用の水を補給するので停車する。この間を利用して、トイレに行くのだが、そんなことを何回か繰り返しているうちに、恥ずかしさ

があたり前のことのようになった。夜汽車は寒気が容赦なく吹き付けるが、これを我慢すれば祖国に帰れると思えば辛抱できることであった。

移動中の食事については、引揚者のだれに尋ねても覚えがないと言う。かすかな記憶では、各自が持参した食糧を細々と食べ、飢えを覚えつつも一心に帰国の日を数えることで時間を過ごしたからであろう。

新京市で数日、錦州市では更に十数日留め置かれ、乗車の順番を待つていた。昼はともかく、野営は寒さが厳しかった。

最後の宿営地は葫蘆島^{コロトウ}であった。日本からの引揚船が到着し、中国とのきずなが切れる港である。ここは、かつて満州軍閥の「張作霖」が、南満州鉄道株式会社^{マニウ}の鉄道経営を経済的に麻痺させるため、別ルートの鉄道を建設して、その貨物のはけ口のために築いた港であった。我々が、この地から満州を去るのも歴史的に皮肉なことであった。

また何日も待つて、やっと乗船日がやってきた。最後の検査があつたが、既に消耗し尽くしていて、取ら

れそんな物は何も残っていない。船はリパティ型で、アメリカ軍の輸送船であったが、船員は全員が日本の青年であった。既に長髪スタイルでしゃれたシャツを着ていて、我々の野良着とは対照的であった。終戦後の日本との違和感を、ここで初めて感じた。彼らは物憂げに行動し、むしろ冷やかな視線を我々に投げかけ、必ずしも同情的ではなかった。船内では共同炊事が行われ、やっと食事らしいものを食べることができた。

山東半島の沖合では九月の台風に遭遇し、それを回避するために、何日も海上を放浪する船酔いの旅が続いていたが、ある日、はるかかなたに青い島影が現れた。祖国日本である。誰もが泣いた。祖国は確かにあった。佐世保港の湾内は松の緑と青い海原と、点在する人家が視野の額縁の中に澄んで見えた。十何年間も祖国を見ていない私にとって、それはまさに別世界であった。

伝染病の予防処置とか、帰国列車の割り当てを待つために、船上でまた数日過ごし、そしてやっと、日本

の大地を踏みしめることができた。慌ただしき手続きを経て、それぞれの帰郷先が決まり次第、引揚者団はまたの再会をほかに期待しつつ、一斉に解散した。

あれから既に五十五年の歳月がたったが、あの引揚げの四十余日間の出来事は、昨日の出来事のようによみがえってくる。今でも悔しくて残念だったことは、多くの同胞が目の前で亡くなっていったことである。自分の運命も、時々二転三転した。そうした事態の中で、何が必要であったのかを探っている。その中で私が欲しかったのは、食糧やお金ではない。一片の確かな情報であった。もし日本政府の確実な情報が得られたならば、難民の人々も死を急ぐこともなく、近い将来を信じて頑張っていたのだろう。満州国政府や、軍部の高官を務めていた日本人の中には、難民を見捨て、いち早く帰国した人も少なくなかったと聞く。今日、世界のどこかで日本人が災害に遭遇したときには、日本政府はあらゆる手段を講じて、僻地の難民に情報を与え、まず激励して欲しいものである。